



基礎学力の定着を図る小・中学校の連携

一ノ

小学校基礎学力診断テストは、これまで13回の実績があり、この間の経過をみると、小学生の基礎学力の定着は確実に進んでいることがわかりました。

ここでは、同一児童生徒の学力をみるために、昨年度から実施された中学校学力診断テスト(平成15年度中学校2年生)の結果を踏まえ、2年前の小学校基礎学力診断テスト(平成13年度小学校6年生)の結果との関連を調べました。

国語について

●小学校基礎学力診断テストから●

平成13年度6年生の全体の正答率は72.4%で良好な結果です。

個々の設問をみると、文章全体を読み取る力が不足しています。

- ・「主題や要旨の把握」 49.8%
- ・「内容の再構成」 49.5%

■中学校学力診断テストから■

昨年度、初めて実施しましたが、全体の正答率は70.8%で良好な結果です。

設問ごとの正答率をみると、領域「読むこと」に大きくバラツキがあった。

- ・「要旨をとらえる」 88.5%
- ・「内容把握や要約」 29.2%

文章の構成をとらえる力の不足(小学校)
文章を論理的に読む力の不足(中学校)

授業改善のポイント

- ・文の組み立てを押さえて読ませる。
(主語・述語、修飾・被修飾)
- ・文と文の関係を押さえて読ませる。
(指示語、接続語)
- ・段落と段落との関係を押さえて読ませる。

授業改善のポイント

- ・説明的文章を書かせることで、読み取る力を付ける。
- ・展開や構成の例を示しながら関係をつかませる。
- ・段落間の順序や関連を考えて読ませる。

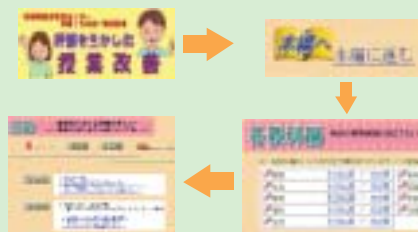
説明的文章を読ませるということ

- ① 書かれている内容を理解させる。(事象の理解)
- ② 言葉のはたらきを知らせる。
- ③ 表現の効果を理解させる。(展開・構成の理解)
- ④ 書かれている内容を要約したり、要旨を述べさせたりする。

研究事業 評価を生かした授業改善(小学校編)から

Ⅱ実践編 国語科における評価の実践 実践例: 中学年

- 1 評価を生かした単元学習指導の展開
教材との出会い→課題解決→表現力育成・振り返り
それぞれの場で、児童の読みの変容を評価する。
- 2 重点化を図った単元指導の構想
中心となる語や文を見つけながら文章を読ませる。



一 小・中学校の学力診断テストを通して



小・中学校間のスムーズな移行を図るために

- 1 小・中学校間の連携を深める。
授業の相互公開
課題を明確にした協議会の設定
- 2 小学校から中学校へ、個々の児童の課題を引き継ぐ。

算数・数学について

● 小学校基礎学力診断テストから ●

全体の正答率は、76.3%で度数分布グラフでは96～100の度数が最も多かった。領域別で見ると、図形の正答率が86.0%と他の領域が70%台であるのに比べ高かった。

- | | |
|------------|-------|
| ・ 図形の合同 | 95.0% |
| ・ 図形の性質の利用 | 87.9% |

■ 中学校学力診断テストから ■

全体の正答率は、62.4%で、平均設定正答率65.0%を少し下回っていた。領域別では、図形の正答率が38.9%と平均設定正答率52.0%を下回っていた。

- | | |
|-----------------|-------|
| ・ 空間における直線の位置関係 | 19.3% |
| ・ 平面図形の運動 | 46.6% |

図形領域は、小学校段階では正答率が高かったが、中学校段階では正答率が低くなっている。

授業改善のポイント

- ・ 定規を使って測るなど、作業的な活動を多くさせる。
- ・ 作図を通して、図形の定義や性質を理解させる。

授業改善のポイント

- ・ 学力の継続性から、できるだけ具体物を用いて学習させる。
- ・ 生徒自身が操作を通して理解を深める。

- ・ 学習指導要領の改訂を踏まえ、小学校と中学校との連携を図る。
- ・ 算数・数学的活動を通して、平面図形や立体図形についての理解を深める。

研究事業 評価を生かした授業改善(小学校編)から

I 理論編 算数科 1 単位時間内の評価は、なぜ必要か？

- 1 算数科の特性とは？
○算数的活動を通じた主体的な学習
- 2 算数の特性からみた評価の在り方
○算数的活動における児童の変容を見て取る必要がある
算数的活動の意義

